

## 【⑥】 橋寺に いしぶみ見れば 宇治川や 大きいにしへは 河越えかねき

宇治橋のもと、橋寺放正院にある上田三四二の歌碑です。三四二の第5歌集『照経』の「橋」と題す歌で、昭和57年の宮中歌会始に選者詠として詠進された作です。

「いしぶみ」は橋寺の重要文化財「宇治橋断碑」をいいます。「<sup>べんべん</sup>浼浼たる<sup>おうりゅう</sup>横流、<sup>そ</sup>其の<sup>はや</sup>疾きこと<sup>や</sup>箭のごとし…」で始まる碑文で、大正2年(1913)僧道登が、旅の難所であった宇治川に橋を架けた由来が記されています。碑文を読み、宇治川は大昔は渡ることが困難であったのかと、宇治川への感慨を詠んでいます。

上田三四二は、昭和27年から10年間、城陽町国立京都療養所の医師として勤務した、南山城ゆかりの歌人です。宇治の橋寺を舞台とした小説「橋寺」(講談社文芸文庫『花衣』所収)は、私たちに親しい橋寺やその付近の風景を丁寧に描写した、美しい作品です。

三四二の歌碑は全国各地にあります。橋寺の碑は一番最初に建てられたものです。発起人は露子夫人、橋寺は上田夫妻にとって思い出のお寺でもあったのでしょう。



橋寺

### 【宇治の文人たち】

宇治の文学碑巡りの愉しみは、宇治の文化や行政に貢献した、地元の文人の詩歌を味わえることにもあります。

## 【⑦】 <sup>いぶ</sup>鳩浮いて <sup>なごり</sup>の池の <sup>夕</sup>茜 <sup>水也</sup>

宇治市観光センターに建つ句碑。「水也」は第2代宇治市長、池本甚四郎の俳号です。氏は文筆を愛した人で、『水也随想』・『句日記』などの著書があります。句は昭和23年11月、宇治市小倉の池本氏の自宅から、現久御山町に向かう途中に詠まれたものです。

「鳩」は「カイツブリ」。「夕茜」は「ゆうばえ」の意。「なごりの池」は「巨椋池の名残を留める池」という意味でしょう。巨椋池は昭和8年から干拓が行われ、昭和16年に完成し姿を消しましたが、どこかにその名残をとどめる池が残っていたのではないのでしょうか。池本氏は干拓事業の中心にあった人物で『巨椋池干拓誌』を著しています。

句は、辺りが夕映えに染まるなか、名残の池の面にカイツブリが浮かぶ情景を詠んだもの。古来人々の生活と共にあり、詩歌にも詠まれた巨椋池を思い、さらに干拓事業に携わった作者自身の感慨を込めて詠まれた句として、味わいたいと思います。

## 【⑧】 朝顔の今日が盛りかも知れぬ <sup>景月</sup>

下居神社に立つ、上林種太郎の句碑です。作者は「宇治朝顔園」の主人として種苗業を営んだ人です。故老によると、地域の植物栽培に多大な貢献をされ、さらに地域の歴史・文化に造詣の深い人であったということです。『宇治市史』の執筆者にも名を連ねます。



「宇治朝顔園」は、明治34年発行「宇治名所十景」の一景に選ばれ、「宇治朝顔園は朝か

ほに菊に其他内外の四季に咲き乱れ全国に稀なる花園なり」と紹介されています。

上林種太郎は、朝顔の交配を何百回とくりかえし品種改良に取り組み、10年、20年かかって、よりよい品種を作り上げていったということです。

「宇治朝顔園」に四季の花が咲くなかでも、作者は朝顔を最も愛し、幾種類もの朝顔を、栽培方法を工夫しながら育てていたのでしょう。朝顔を慈しみ育てるなかで、1日1日の花の微妙な変化を感じていたに違いありません。そうしてある日、今日が朝顔の、この年の極まりの、盛りの日ではないかと、感じたのだと思います。朝顔への愛惜の情と、さらに背後に、自身や人の世の移ろいを惜しむ思いも、込められているように味わえます。

